

## 私の人生の試練

アンナ・ペトローヴナ・コストリギナ

竹内高明 訳

神は、その人が耐えられるだけの試練を、各人に与えるのだという。

私は 1944 年 7 月 24 日、キロヴォグラード州ノヴォアルハンゲリスク村に生まれた。1 歳の時父が亡くなったが、それは 1945 年のことだった。戦後の苦しい時期を私は母と伯母とともに過ごした。母と伯母はコルホーズで働いており、私は彼女らといつも一緒にいた。二人は鋤で畑を耕し（私は、幼稚園というものしたことなど知らないでやはり畑にいた）、みんなにパンのかけらと水が行き渡ればいほうだった。一緒に家に戻るまで、お昼寝するのも畑でだった。



ゼムリヤキ事務所のイケバナと、2006 年 9 月

私は、文字も数字も全然知らないまま、ズックの鞆を持って 1 年生の授業に通い始めた。でもその代わり、村の女たちが畑仕事から帰りながらうたう歌の数々をすでに知っていた。私の周囲の素朴な人たち、隣人や同級生の友だち、その両親たちのことが好きだった。

10 年生の勉強を終えた後、私は 8 年制の学校でフランス語の教師になったが、勤務時間と給料は正規の半分しかなかった。

2 年後、シェフチェンコ記念キエフ国立大学に入学した。そして母が亡くなった!!! 伯母は、12 ルーブリの年金をもらっていた（年金額の計算は、平均した月給額の 1.95 ルーブリに基づいており、労働日は算定の根拠になっていなかった。当時、伯母の勤労歴は 50 年を超えていた）。

私は、大学生生活の 5 年間ずっと寮に住み、月に 35 ルーブリの奨学金を支給されていた。この金額で、寮費、通学の交通費、食費、ノート代、衣料費などがまかなえるはずだというのだった。

人のものをもらって着たことは一度もなかった。更紗のワンピースを自分で縫った。休暇には、コルホーズで絵を描くアルバイトをし、自分と伯母の生活の足しにした。

大学卒業後、キエフ州スリモフの中等学校で 4 年間フランス語教師の仕事をした。その時も、何もない寮の部屋に住んでいた。

やがて私は、チェルノブイリ原発の職員にはすみやかに（働き始めて 2 年後に）住居の配給があるという話を聞き、迷わずプリピャチに行った。そしてそのままそこで 14 年を過ごすことになったので

ある。最初はやはり、9 m<sup>2</sup>の寮の部屋に住み、住居の配給を7年待つはめにはなったのだけれど(93歳で亡くなった伯母のカーチャのことは、いつも面倒をみていた)。

1972年から1986年まで、私はプリピャチで暮らした。多くの木、花、灌木にめぐまれたこの原発職員の町は美しかった。すべての建物は美しく、独創的に設計されていた。私たちはそこで快適に、楽しく過ごしていた。公民館、映画館、5つの中等学校、文化会館、食料品店などの店、すべての設備が整った快適なアパート。その頃はまだ若く、健康だった私たちに、それ以上の何が必要だったろう？

しかしその時、あの宿命の夜、1986年4月26日の夜がやってきたのだ。

その夜、私は寝つくことができないでいるうち、何か雷鳴のような音を耳にした。「5月の初めの雷雨が好きだ」という詩句を思い出し、「でも私は雷雨が好きじゃない、怖いんだ」と思った。窓際に行き、窓を開けると、雷鳴が聞こえた方角に、空高く届く赤い照り返しが見えた。

「どうしたんだろう？」と私は思い、なぜか恐ろしくなった。雷鳴がとどろく合い間に(私は、チェルノブイリ原発から蒸気が排出されたのだと思った)、猫の叫び声や、犬の吠える声が聞こえた。でも、何が起こったのだろうか？ その奇妙な照り返しの光は、私を不安にさせ、頭がずきずきと痛み始めた。「明日は学校に仕事に行かなきゃ」と私は思い、睡眠薬の錠剤を飲んで床に就いた。なかなか眠れず、薬を飲んでいなければ寝つけなかっただろう。

朝になり、私は第1番学校へと急いだ。暑い日で、私は薄手の夏物のワンピースを着ていた。砂場ではすでに、子どもたちが母親やおばあさんと遊んでいた。だが頭上では、空が、冬の日没時のように何か不思議なバラ色の輝きを見せており、ヘリコプターが飛んでいた。

授業が佳境に入っていた時、突然、生徒の一人の母親が泣きぬれて教室に入ってきて、娘に叫んだ。

「ナターシェンカ[訳注：ナターリヤの愛称]、大変よ！ 原発で事故が起こったの！ パパはモスクワの病院に連れて行かれたわ！ ヴァレーリイ・ホデムチュクは、遺体も見つからなかったのよ！」

その後、私たち教師は職員室での会議に呼び出され、床、机、廊下を丹念に洗い、教室では秩序を乱さぬように言われた。特に重要なのは拭き掃除だということだった。

授業後、肝心なことは何も知らないまま、生徒たちと教師たちはめいめい家に帰った。通りでは、ふだんと同じように人々が歩いていた。娯楽を楽しむ人たちもあれば、店や市場に行く人たちもあり、いつもと変わらない平穏な生活が続いていた。

そして翌日、日曜日には、第1番学校の生徒たちのために、「楽しいスタート」という運動会が開かれた。それは午前中の行事で、教師たちも子どもたちも参加していた。大事な行事だったので、必ず出席しなければならなかった。

プリピャチ市民の避難について知らされたのは、ラジオを通じてだった。避難は3日間であり、身分証明書と3日分の食べ物を持参するように言われた。給料日の直前だったので、私は8ルーブリシ

か持ち合わせがなかった。

私の家族、夫と2人の子とも私は、他のすべての家族と同じようにバスに乗せられ、1人ずつ座席を与えられた。着の身着のまま出発し、下着の替えすら持っていなかった。3日後には戻ってくると言われたのだから。

バスに乗っている間に、上の娘は足の痛みを訴えた(彼女は、事故の前日に、体育の授業で足の骨を2ヶ所折っていたのだ)。下の娘アリョーヌシカ[訳注：アリョーナの愛称]は、悲しげに窓の外を眺め、水をちょうだいと言った。この子は、生後11ヶ月の時の予防接種がもとで手足が麻痺しており、障害者になっていた。

私の家族は、ボブリエという村に連れて行かれた。夫は、他の男たちと同様、原発職員たちを原発に運んで行くバスにやがて乗せられた。私は、まるで戦場に送り出すように彼を送り出し、涙にむせんだ。彼がそれからどうなるのか全くわからなかったし、残された私たちがどうなるのかもわからなかった。3日間が過ぎたが、私たちが家に戻ることはなかった。畑でジャガイモを収穫する手伝いをしなければならなかった。ボブリエのコルホーズ当局が、私たちが畑に行かせたのだ。私は無力感を覚え、ほとんど泣き通しだった。

医師が、避難者のいる家を往診に回り、ヨード剤を配付した。私は血圧を計られたが、それほど高い血圧(100から190)は生まれて初めてだった。それまでは、ずっと70から110だったのに。

私は自分の家から遠く離れ、見知らぬ、しかし善良な人たちの間で泣き暮らしていた。上の娘は足が痛み、キエフで治療を受ける必要があった。車椅子に乗っている下の娘も、医者に診てもらわなければならなかった。

一方、私たちが泊めてくれていた家の人たちは、私の持ち金がすでに尽きていることを知っていた。コルホーズが25ルーブリを出してくれた。そのお金で、私たちともう1家族をキエフの外来病院まで連れて行ってくれる運転手を見つけることができた。それはとても幸運なことだった。というのは、ポレススコエでは大パニック状態になっていたからだ。バスは超満員になっていたし、人々はその周りで、恐怖と無力感から狂気から恐れ、叫んだり何かを聞き出そうとしたりしていた。

外来病院で診てもらうのはたやすいことではなかった。まず放射線測定を受けなければならなかったのだ。服は全部、髪も、体も放射線を発していた。放射線のチェックを受けたという証明書



下の娘、アリョーヌシカと

を受け取ってから、私たちは外科医に診てもらった。

アリューヌシカの状態はとても悪く、入院することになった。長女のヴィクトリヤは、足にギプスを当ててもらった。どうしたらよいだろう？ アリューヌシカは、私が病院で付き添わなければどうにもならないし……。私は、翌日入院できるように頼んでおいた。

キエフで、長女を預けられる人を誰か探す必要があった。それで私たちは、私の学生時代の友人、ニーナ・ガルイチを頼って行った。ニーナのところに行く途中、私は路面電車の中で気を失った。その日、いつ食事をし、何を飲んでいたのか、私は覚えていない。それ以前の数日間にも、私の体はすでに弱っていた。興奮のため、ボブレイでも、食べ物や飲み物が喉を通らなかったのだ。放射線のせいで、胃が食べ物を受け付けなかったのか、それとも夫や家族みんなのことを思って不安にとらわれていたのか。

ともあれ、私たちはニーナの家までたどり着き、洗濯用せっけんと洗剤で体を洗った(誰かが、洗濯用の粉末洗剤なら放射性物質が落ちると言ったのだ)。服も洗い、アイロンをかけて乾かした。近所に、放射線測定の仕事をしている人が住んでいた。彼がやってきて、私たちの放射線を測り、「頭を放射線から少しでも守るために、髪の毛を剃らなければいけない」と言った。私たちは髪をととても短く切った。

私はいつも、善良で信頼できる友人たち、本当にいい人たちの縁に恵まれていた。昔の同級生たちが、私の不幸を知って、伯母から私の居場所を聞き、80ルーブリを送ってくれた。私がどんなに泣いたことだろう！ 彼らのおかげで、私はその時救われたのだ。私たちは更紗でワンピースを縫った。一方、友だちのモーチャ[訳注：マトローナの愛称]・ゴルバチェンコは、あらゆる病院で私を探し、そして探し当てた。彼女は食べ物だけでなく、新しい服を持ってきてくれた。でもこういったことすべては、事故からほとんどひと月経った後のことだ。事故後最初の1ヶ月、私はずっと汚染された服を着、汚染された靴をはいて歩いていた。

あのおぞましい日々を今思い出すのは、とてもつらいことだ。

原発宛に私は何通かの手紙を送り、そしてついに夫から短い電報を受け取った。「アンヌーシカ[訳注：アンナの愛称] 心配するな 俺は大丈夫 もうすぐ会おう」。

その頃、私は病院にあった新聞をむさぼるように読んでいた。そこには、夫たちが装甲車で作業の現場に運ばれていくさまが書かれていた。暑い季節だった。彼らはガーゼの薄っぺらなマスクをつけ、木綿の防護服を着て働いていた。私がどんなに夫の健康を危ぶんだことだろう！ 私は夫が生きているようにと祈った。しかし、夫に会えたのはやっと9月になってからだった。数日間だけ休暇をもらえたのだ。だがその後、彼はまた事故処理作業に出かけていった。作業については、一度も、何一つ話さなかったし、今でも話そうとしない。

11月になって、私たちはキエフで一時的にアパートを支給された。しばらくしたら、スラヴチチ市に引っ越すということになっていた。最も恐ろしいことはすでに過ぎ去ってしまったかのように思え

た。でも、そうではなかった。次女のアリョーナシカ健康が悪化してきたのだ。やがて肺炎にかかった彼女は衰弱し始め、手の指と爪が紫色になっていった。入院した病院では、彼女の肺に管が差し込まれ、もう1本の管が胃に挿入された。人工呼吸器をつけ、人工栄養を流し込まれながら、彼女は2ヶ月集中治療室に入っていた。そのような治療の後でさらに生きながらえる人は、理論上はまれである。しかし、私と娘は闘いに勝利を収めた。娘は、座った状態でまた呼吸ができるようになったのだ。だが、横になると彼女は息をつまらせた。ドイツの友人たちが、私たちの不幸を知って、娘のために在宅用人工呼吸器を提供してくれた。この機器のおかげで、娘はさらに3年半生きることができた。夜人工呼吸器をつけて眠る女の子は、ウクライナ中で彼女一人だったろう。一晩中マスクを歯に装着することで、呼吸器が娘の肺に空気を送り込んでくれた。なんと勇気のある娘だったことか！

だが、事故から10年経った時、娘はもうこの世にいなかった。今年7月13日で、亡くなってからもう9年[訳注：原文のママ]になる。人工呼吸器は、「チェルノブイリの子どもたち」という団体を通じて、ドイツに返却した。

誰も、自分の子どもを葬るという悲しみを味わわなくてすみますように。それは、ほんとうに恐ろしい不幸であり、いつまでも忘れることができないのだから！

しかし、生きていかなければならなかった。ある日、私は「ゼムリャキ[同郷人たち]」という団体にめぐりあい、そこで励ましと理解、援助、友人を得ることができた。また、私と同じように、生き延び、生き続けていかなければならない女性たちと会う喜びを知った。そこで自分の趣味を思い出すこともできた。私は歌えるし、それによって人々に喜びを与えることができるのだ。そして私は、折にふれて自分で作曲した歌や、ナターシャ・ゴンチャローヴァと作った歌を歌い始めた。私たちは一緒に歌い、ロシアの歌やウクライナの歌でみんなを楽しませるようになった。私はまたイケバナも作れるようになり、それを「ゼムリャキ」に飾ったり、友だちにあげたりしている。時には、自分の苦しみを詩にあらわし、それも「ゼムリャキ」で披露する。

「ゼムリャキ」は、元プリピャチ市民のヴォランティアたちが設立した団体だ。この団体は、みなが自分の思いを語れる場所でもあり、自分の不幸を身近に感じ、理解してくれる人たちと交わる唯一の可能性を与えてくれるところでもある。少しの時間でも「ゼムリャキ」で過ごせば、同郷人たちとの出会いの喜びを感じることができるのだ。



日本からの訪問客を歓迎して歌うコストリギナさん

そして今、私を新たな試練が待ち受けている。私はこれまでもう9回の手術を受けているが、今、10回目の、私にとって最も恐ろしい手術を受けようとしているところなのだ。これまでは良性腫瘍の手術だったのだが、それはすでに過去のことであり、今度は直腸ガンが発見されたのである。まず、7月10日から放射線照射の治療を受けることになっている(この治療を受けるにも、順番が来るのを待たなければならない)。その後で、手術を受けるのだ。

それはともあれ、「ゼムリャキ」の友人たちは、私の不幸を知って、すぐに援助をしてくれた。私を団体の事務所に呼んで、鎮静剤やその他の薬、使い捨て注射器、そして手術費の足しにと100グリヴナまでくれたのである。こんな優しい配慮に胸を打たれ、私は泣いてしまったほどだった。私は何も頼まなかったのに……。

私は、「ゼムリャキ」の友人たちみんなが、私のことをとても心配してくれており、私がこの新しい試練、手術を乗り越え、生き続けて、これまでと同じように人生を楽しめるようにと祈ってくれていることを知っている。この恵み豊かな大地で、花の一輪一輪、木の葉の一枚一枚、くもりのない空と善良な人々に喜びをおぼえることができるように、と！

私の友人たち、そして日本の友人たちに、愛をこめて

アンナ・ペトローヴナ・コストルィギナ

2006年7月6日